

研究者によるケアワークを、誰が、いかに支えるか？

—研究者のための臨床社会学に向けて—

大阪市立大学 木下衆

1 目的

本報告は、社会学研究者が家庭で担うケアワークに注目し、現在我われが抱えている特徴的な困難を明らかにする。その上で、それを誰が、いかに支えていけるのか、特に公的な制度利用と関連付けながら、検討する。

本セッションのもととなった江原（2016）では、社会学を学んだ「卒業生」が「対人援助を提供する」専門職に就いていることを念頭に、彼らを支援するためにも新たな専門資格を構築できないかと、提案がされている。江原による、社会学的知識（あるいは想像力）が「対人援助」において重要であるとの考え、また社会学が「重要な『専門的知識』であることを社会に対して明確に主張する責任」についての議論には、私も大いに賛同する。

そこで私は、その江原（2016）の問題設定を引き継ぎつつ、逆に、社会学を専門とする「研究者」が「対人援助を受ける」際の困難に注目して、報告を行いたい。現在、私も含め多くの研究者が、家庭内で育児や介護などのケアワークを担い、それによって自分自身も何らかの支援を必要とするという、いわば二次的依存状態を抱えている。そこで生じる問題は、大学院生や非常勤勤務といった身分と関連することもあるが、仮に常勤であっても、さまざまな困難は継続しうる。しかし、研究者が対人援助を受ける際の困難（あるいはそれをいかに乗り越えるかという方法）は必ずしも十分に検討されていないと、私は捉えている。

以上の問題意識のもと、本報告は、研究者自身の生活を社会的に分析する。

2 方法

データとしては、現在ケアを担っている複数（4、5名を予定）の社会学研究者へのインタビューを取り上げる。例えば、院生時代から親の介護を経験しているケース、常勤職を得たものの子どもの保育所利用で困難を抱えたケースなど、育児と介護双方の事例を比較しながら、共通した論点を抽出するという方針を取る（事例の詳細については、当日の議論を参照のこと）。

3 結果

本報告では特に、「介護保険制度を利用する」「保育所の利用申請をする」など、公的な制度利用との関連で、考察を展開する。仮に、二つの論点を提示する。一つは、「研究」が「労働ではないもの」としてカテゴライズされた場合の不利益について。これは特に、院生時代の制度利用では死活問題となる。もう一つは、ケアワークを担う場合のロールモデルの不在について。何らかの制度を利用する場合、すでに経験者がいたはずなのに、その情報が共有されない。もしくは研究室や学会が相談の場として機能していない現状について、考察する。

4 結論

ケアワークに関連する研究者の困難を、個々人の努力のみで解決することには限界がある。当日は、研究者同士の新たな互助の必要性を明らかにしつつ、その方向性も提案したい。

文献

江原由美子、2016、「社会学を基盤にした新しい専門職？」『理論と方法』31(2): 318-321